

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2020

課題番号：15K17264

研究課題名(和文) 乳児期における情動とアタッチメント：関係性のオーガナイザーとしての情動に着目して

研究課題名(英文) Emotion and attachment in infancy: role of emotion as organizer of relationships

研究代表者

本島 優子 (Motoshima, Yuko)

山形大学・地域教育文化学部・准教授

研究者番号：10711294

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は生後1年目における乳児の情動発達の個人差を規定する諸要因について実証的に明らかにすることを目的とした研究である。母子53組を対象に生後3ヵ月から10ヵ月にわたって計4回の縦断調査を実施した。分析の結果、母親の情動経験や家族の情緒的雰囲気は後の乳児の喜びや怒りの情動表出と有意に関連したことが示された。乳児期の情動発達に養育環境の要因が影響を及ぼすことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は乳児期の情動発達に関わる要因について検討することを目的とした研究である。分析の結果、日常における母親の情動経験や家族の情緒的雰囲気が後の乳児の喜びや怒りの情動表出と関連したことが示された。これまで乳児の情動は生得的で不変的な気質的特性として見なされることが多かったが、生後1年目より乳児の情動発達は養育環境の要因によっても一定の影響を受けることが示唆された。このことは、乳児の情動発達に関して新たな知見をもたらし、今後の研究のさらなる発展に寄与し得るものと思われる。

研究成果の概要(英文)：The goal of this study was to examine the determinants of individual differences in emotional development in infancy. Participants included 53 mothers and infants who visited the laboratory at 3, 4, 6, 10 months. The results showed that the mother's emotional experiences and family emotional expressiveness were significantly associated with the later expression of infants' joy or anger. The finding suggested that caregiving factors influenced emotional development in infancy.

研究分野：発達心理学

キーワード：情動 アタッチメント 縦断研究

## 1. 研究開始当初の背景

従来よりアタッチメントと情動との関連については、アタッチメントの組織化がまず先にあり、そこから個人特有の情動表出や情動制御などの情動スタイルが生み出されていくという因果の向きが暗黙裡に想定されてきた。現に、安定型の子どもはネガティブな情動表出が少なくポジティブな情動表出がより多く (Smith et al., 2006) 抵抗型の子どもは恐れや苦痛の情動を強く表出し (Kochanska, 2001) 回避型の子どもは情動表出が少なく慰撫行動が多い (Leerkes & Wong, 2012) ことが報告されている。

しかし、元より親密な社会的関係は情動に由来しており (Izard et al., 1991) 発達早期の養育者との相互作用経験の中で子どもの情動は徐々に(ある情動は最頻的に経験され、ある情動は最稀的に経験されるといったように)組織化されていき (Malatesta, 1990) そうした個人特有の情動バイアスに導かれるかたちでアタッチメントの形成が漸次的に進んでいくと考えられる (Magai & McFadden, 1995) つまり、情動は関係性のオーガナイザーとして機能しており (遠藤, 2013) 従来想定されてきた因果の方向性とは反対に、発達早期に経験する情動の特質がアタッチメントの組織化を導いていく可能性が考えられるのである。具体的に、Malatesta & Wilson (1988) は、アタッチメント安定型の子どもは相対的にポジティブな情動を、回避型の子どもは恐れや苦痛の情動を、抵抗型の子どもは怒りもしくは悲しみの情動を中核としてアタッチメントの組織化が進行していく可能性を論じている。

こうした Malatesta-Magai の論考は大変興味深く、注目に値する理論である。しかし、実のところ、よりダイレクトに Malatesta-Magai の理論を検証した研究は未だ行われておらず、その実証的検証が待たれるところである。従来検証されてきたアタッチメントが組織化された「後」の子どもの情動発達ではなく、アタッチメントが組織化される「前」の、生後1年目における子どもの情動について焦点を当て検証を行うことが重要であるといえる。

## 2. 研究の目的

そこで本研究では、Malatesta-Magai の理論に基づき、アタッチメント形成における情動の役割について実証的検証を図ることを目的として、(1) 生後1年目において、生得的な気質要因に加え、養育者自身の情動スタイルや養育行動に起因して、いかに乳児の情動の特質が形成されていくのか、(2) 生後1年目における乳児の情動の特質が生後2年目(18ヵ月)における子どものアタッチメントをいかに予測するかについて、生後3ヵ月から18ヵ月にわたる緻密な縦断データに基づいて実証的検討を行う。

しかしながら、2020年に新型コロナウイルス感染症が発生し、その収束の見通しが立たないことから、20年度に実施予定であった生後18ヵ月の調査(乳児のアタッチメント測定)を中断することとなった。そのため、当初の研究計画を変更し、最終的に、目的(1)乳児期の情動発達を規定する諸要因(乳児の気質、家庭内の情緒的雰囲気、養育者の情動特性、養育行動)について検証することとした。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究協力者と手続き

53組の母子にご協力いただいた。生後3、4、6、10ヵ月に大学の実験室で観察、実験、質問紙の調査を実施した。

### (2) 測度

#### 情動に関わる諸要因

#### 母親の養育行動(生後3、6ヵ月)

10分間の母子自由遊び場面における母親の行動(感受性や侵入性など)や情動表出について観察を行った。

母親の情動経験(生後3、10ヵ月): 母親が日常生活で経験する喜び、怒り、悲しみなどの情動の頻度について、Differential Emotions Scale (Izard, 1972) の質問紙による自己評定を求めた。

母親の抑うつ(生後3、10ヵ月): 母親の抑うつ状態について、CES-D (Radloff, 1977) を用いて自己評定を求めた。

家族の情緒的雰囲気(生後3、10ヵ月): 家族全体の情緒的雰囲気について、(Cassidy et al., 1992) の質問紙を用いて母親に回答を求めた。

乳児の気質(生後3、10ヵ月): 乳児の気質について、Infant Behavior Questionnaire (IBQ: Rothbart, 1981) の質問紙を用いて母親による評定を求めた。

#### 乳児の情動実験(生後4、6、10ヵ月)

Laboratory temperament assessment battery (Lab-TAB: Goldsmith & Rothbart, 1999) に準じて、乳児の情動実験を実施した。喜びの情動を喚起する場面としてくすぐり遊び、怒りの情動を喚起する場面として乳児の腕をそっと押さえる場面、恐れや苦痛の情動を喚起する場面として怪獣

などの人形を提示する場面を選定した。実験場面における乳児の情動反応は Lab-TAB のマニュアルに従って評価した。

#### 4. 研究成果

乳児の喜びの情動について、微笑の強度・ピーク・潜時、笑い、発声、身体の動き（手を叩く、リーチングなど）の評定に基づいて、乳児の喜びの情動得点を算出した。そして、生後 4、6、10 ヶ月における乳児の喜びの情動と諸要因（乳児の気質、家庭内の情緒的雰囲気、養育者の情動特性）との関連性について相関分析を行った。その結果、生後 3 ヶ月に回答された母親の怒りの情動経験は、生後 4 ヶ月の乳児の喜びの情動得点と有意な負相関を示した（ $r = -.29, p < .05$ ）。また、生後 3 ヶ月に回答された母親の敵意の情動経験は生後 6 ヶ月の乳児の喜びの情動得点と有意な負相関を示した（ $r = -.33, p < .05$ ）。日常において怒りや敵意の情動をより多く経験していた母親の乳児ほど、後の喜びの情動表出がより低かったといえる。

次に、乳児の怒りの情動について、身体のもがき、表情、発声、潜時の評定に基づいて、乳児の怒りの情動得点を算出した。そして、乳児の怒りの情動と諸要因（乳児の気質、家庭内の情緒的雰囲気、養育者の情動特性）との関連性について相関分析を行った。その結果、生後 3 ヶ月に回答された家族のポジティブな情緒的雰囲気は、生後 4 ヶ月の乳児の怒りの情動得点と有意傾向で負相関を示した（ $r = -.24, p < .10$ ）。ポジティブな情緒的雰囲気が高い家族の乳児ほど、後の怒りの情動表出がより低かったといえる。

これまで乳児の情動は生得的で不変的な気質的特性として見なされることが多かったが、生後 1 年目より、乳児の情動発達には養育環境の要因によっても一定の影響を受けることが示唆された。このことは、乳児の情動発達に関して新たな知見をもたらし、今後の研究のさらなる発展に寄与し得るものと思われる。

今後の課題として、まだすべてのデータ分析を終えていないことから、早急に分析を進める必要がある。特に、乳児の恐れや養育者の養育行動について評定を行い、乳児期の情動発達に果たす養育環境の役割についてさらに詳しく検討し、明らかにしたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 本島優子
2. 発表標題 生後3-10カ月にわたる乳児のポジティブ情動の発達軌跡
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

山形大学赤ちゃん研究室 <a href="http://baby.apples.jp/">http://baby.apples.jp/</a>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------